

**[D年] 復活節第6主日(2024年5月5日)****【旧約聖書日課】 出エジプト記 33章7~11節**

7モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった。8モーセが幕屋に出て行くときには、民は全員起立し、自分の天幕の入り口に立って、モーセが幕屋に入ってしまうまで見送った。9モーセが幕屋に入ると、雲の柱が降りて来て幕屋の入り口に立ち、主はモーセと語られた。10雲の柱が幕屋の入り口に立つのを見ると、民は全員起立し、おのおの自分の天幕の入り口で礼拝した。11主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセは宿営に戻ったが、彼の従者である若者、ヌンの子ヨシュアは幕屋から離れなかった。

**【使徒書日課】****ローマの信徒への手紙 8章28~39節**

28神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしてあげようとお定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

31では、これらのことについて何と言ったらよいでしょうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義とさせていただくのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができますか。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成して下さるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことがで

きましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」。

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛して下さる方によって輝かしい勝利を収めています。38わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

**【福音書日課】****ヨハネによる福音書 16章25~33節**

25「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。27父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。28わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。30あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」31イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。32だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいて下さるからだ。33これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記 33章7～11節

7モーセは天幕を取って、それを宿営の外の宿営から離れた所に張り、それを会見の幕屋と名付けた。主に尋ねるときはいつも、宿営の外にある会見の幕屋に出て行った。8モーセが天幕に出て行くときは、民は皆立ち上がり、おのおのの天幕の入り口に立って、天幕に入るまでモーセの後を見送った。9モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て天幕の入り口に立ち、主はモーセと語られた。10民は天幕の入り口に立つ雲の柱を見ると、皆立ち上がり、おのおのその天幕の入り口でひれ伏した。11主は、人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰っても、その従者である若者、ヌンの子ヨシユアは天幕を離れなかった。

## ローマの信徒への手紙 8章28～39節

28神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者のためには、万事が共に働いて益となるということを、私たちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子のかたちに似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くのきょうだいの中で長子とされるためです。30神はあらかじめ定めた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とした者に栄光をお与えになったのです。

31では、これらのことについて何と云うべきでしょう。神が味方なら、誰が私たちに敵対できますか。32私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜らないことがあるのでしょうか。33誰が神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義とさせていただきますのは神なのです。34誰が罪に定めることができますでしょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右におられ、私たちのために執り成してくださるのです。35誰が、キリストの愛からわた

したちを引き離すことができましょう。苦難か、行き詰まりか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。

36「私たちはあなたのゆえに、日夜、死にさらされ屠られる羊と見なされています」。

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、私たちが愛してくださる方によって勝って余りあります。

38私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、39高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちが引き離すことはできないのです。

## ヨハネによる福音書 16章25～33節

25「私はこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26その日には、あなたがたは私の名によって願うことになる。私があるがたのために父に願ってあげよう、とは言わない。27父ご自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、私を愛し、私が神のもとから出て来たことを信じたからである。28私は父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。」30あなたがすべてのことをご存じで、誰にも尋ねられる必要がないことが、今、分かりました。これで、あなたが神のもとから来られたと、私たちは信じます。」31イエスはお答えになった。「今、信じるというのか。32見よ、あなたがたが散らされて、自分の家に帰ってしまい、私を独りきりにする時が来る。いや、すでに来ている。しかし、私は独りではない。父が、共にいてくださるからだ。33これらのことを話したのは、あなたがたが私によって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」

## 黙想のためのノート

## 次主日の教会暦と聖書日課

・5月5日「復活節第6主日」の日課主題は「キリストの勝利」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「金の雄牛事件」に関連して触れられる「臨在の幕屋設置譚」の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「神を愛する者」として神の愛を絶対的に信頼する姿勢を訴える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「最後の晩」に弟子たちに語られた主イエスの教えの末尾の箇所。

## 旧約日課(出エジプト 33 章より)

・「出エジプト記」については、過去の資料「聖書と祈りの会 240327」および「同 240403」も参照。「モーセ物語」の第一部を構成する「出エジプト記」は、「モーセの誕生と召命譚」を序章として、「エジプトを去るまで」を扱う前半部(3～15章)、「エジプトを離れて荒野を経てシナイ契約に至るまで」を扱う中間部(16～24章)、それを受けて「幕屋建設と掟の石の板」を扱う後半部(25～40章)に大きく区分される。前半部の主題は「過越の出来事と記念」、中間部の主題は「十戒および法に基づく契約」、後半部の主題は「神の臨在の象徴としての幕屋および掟の箱」である。ただし、各部分は相互に関連させるための記事を組み込んでおり、全体としての連続性を保持させている。

・日課箇所は、本書後半部の中間、いわゆる「金の雄牛事件」の後処理であるかのように位置づけられているが、物語展開上は無理がある。そもそも、本書後半部の物語は「幕屋建設の指示」→「金の雄牛事件」→「幕屋建設の実施」と展開し、この展開をつなぐ要素として「掟の板の授与」が組み合わされている。日課箇所で示される「臨在の幕屋」は、この大枠の物語展開で最終的に(最終章で)完成が示されるはずの「幕屋」であって、別個のものとは考え難い。もっとも、これらは元来別個の「幕屋伝承」であったものを同じ一つの「幕屋」であるかのように編集した結果かもしれない。つまり、「幕屋建設の指示と実施」で示される「幕屋」は祭司たちによる祭儀の場としての「移動式聖所」の起源譚、他方で「臨在の幕屋」は「シナイ山の神」がシナイ山を離れても民のもとに臨在することを示す原因譚、と別伝承が推認される。その場合、前者は「アロン系祭司」に関連する聖所祭司集団で伝承され、後者は「モーセ系祭司」に関連する聖所祭司集団で伝承された、と仮説的に推認できるかもしれない。

・「臨在の幕屋」の表現は、27～40章で繰り返し見られる(邦訳で 35 用例)。しかし、日課箇所のように「雲の柱」によって臨在が示される「臨在の幕屋」の描写は、40:34 以下などに限られる。ただし、エジプトを去った直後の「民」の描写(13:17 以下、14:24 など)、また、「シナイ山」入山時の描写(19章、24:15 以下)は、同系列の表現である。

## 使徒書日課(ローマ 8 章)

・「ローマの信徒への手紙」については、資料「聖書と祈りの会 240327」なども参照。本書簡文書は、使徒パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、自身のローマ訪問計画を告げ、受け入れとその後のエスパーニア伝道計画への協力を求めて著された。ローマでは、使徒ペトロらの指導のもとで、ユダヤ人信者を中心とした教会共同体群が形成されていたと考えられる。当時のユダヤ人社会＝ユダヤ教会堂共同体では、異邦人を積極的に受け入れていたが、彼らが共同体の正規構成員になるためには「割礼」と「律法(戒め)」に基づいた生活習慣の遵守が要件とされていた。パウロは、キリストによって始められた「新しい共同体」のあり方を突き詰めたとき、「洗礼」のみを要件として異邦人を教会共同体に受け入れることを強く主張し、この問題を巡って主要な使徒らのもとにある人々と一時的に対立した。その後、コリント伝道での協力経験を経てパウロは調停的な立場に転じたと考えられるが、ローマにはかつてのパウロの強硬な姿勢を憂慮する者がいる可能性があった。パウロは、そのような人々に現在の自分の主張を理解してもらおうべく、本書簡で、「救いの共同体」に関する神学議論を展開している。

・日課箇所ではパウロは、「神を愛する者たち」が神の絶対的な愛に信頼して生きる者であることを訴えている。その前提として論じられていたのは、「神の霊によって導かれる者」＝「神の子」(8:14)という図式であり、この「霊」がキリストと結ばれる「洗礼」によって信じる者を導くようになっていると主張している(8:1 以下など)。パウロは、信じる者に「神の子とする霊」が与えられていることの証左として、神に向かって「アッバ、父よ」と呼びかけるようにされていることを挙げている(8:15)。これは、主イエスが弟子たちに祈りの際の呼びかけとして教えた「父よ」であり、初期の信者にとって他のユダヤ教徒と一線を画す「イエスに従う者」に固有かつアイデンティティともなる習慣であったと考えられる。神を「父」や「親」に譬える表現は、「旧約」にも少なからず見られる(詩 68:6、89:27、103:13、イザヤ 9:5、63:16、64:7、マラキ 2:10 など)。しかし、1世紀当時のユダヤ教主流派を形成していたラビたちは、より思索的に、神が人間を超越した存在であるとして、人間との近さよりも違いを強調し、神の呼称として「天」などのより婉曲的な表現を好んだとされる。そのような時代に、神との近さや人間との類比性を強調する「父」という呼称表現は、主イエスの教えの独自性を端的に示すものとして弟子たちによって積極的に継承されていたのだろう。信じる者を主イエスと並ぶ「神の相続人」と呼び、「神の子(テクノン)」とも呼ぶことは、「恵み」を基礎とする救済神学を構想するパウロにとって自然なことであり、むしろ、このような呼称表現がパウロの「恵み」の神学を方向づける重要な契機になっている。

・28 節「万事が益となるように共に働く」の直訳は「すべてが善に向かって相働く」。

**福音書日課(ヨハネ 16 章より)**

・日課箇所は、主イエスが弟子たちと共に過ごした「最後の晩」の一連の教えの末尾に置かれた励ましである。「ヨハネ福音書」は、これに続いていわゆる「大祭司の祈り」と呼ばれる主イエスの祈りを伝えている(17章)。

・「ヨハネ福音書」の描く主イエス像は、「御父のもとから遣わされ、御父の言葉を語り、御父の業を行う、御父と一体の存在」であり、「世に来られた方」として、選ばれた「弟子たち」を「世から選び出して」ご自身と一体のものとして、「御父の身許に帰られる」方である。この関係性は、さらに「弟子たちが」「世に遣わされる」ことによって「他の者たち」にまで拡大再生産され、それによって「世を愛された」御父の「世が救われる」という御心が実現していく、というのが本福音書の救済観である。この「世に遣わされる」という契機の中に、主イエスが経験し、また弟子たちも経験することになる「苦難」が必然的に内包され、それを避けて通ることはできないが、その先には「世が救われる」という「勝利」が見据えられているのである。

・この救済観には、段階を追って「御父」と一体化される者たちが拡大していくことが含まれている。すなわち、最初の段階では、「御父」と一体であるのは「御子」である主イエスのみであるが、ある段階(主イエスの死と昇天)を経て、主イエスに導かれていた「弟子」も「御父」と一体化し、主イエスを介することなく「御父」との直接的な関係を構築するに至るものとされている。この「御父」との一体性は、「弟子たち」の「世」に対する働きによって、さらに「世の人々」に拡大されていく。  
・33節「勇気を出しなさい(タアルセイテ)」は、「安心しなさい」(マタイ 14:27、マルコ 6:50、10:49)、「元気を出しなさい」(マタイ 9:2,22)、とも訳される。

**来週の誕生日 (5月5日～11日)****主日礼拝の讃美歌から**

・21-206 番「七日の旅路」(I 56)は、「アメージング・グレース」(21-451 番)を作った 18 世紀英国教会の司祭ジョン・ニュートンの作詞。彼は、若いころに奴隷船船長として難船経験をして回心し、伝道献身生活に入った。曲は、米国人マーカス・ウェルズの作詞作曲した別讃美歌から曲だけ採用。この曲で、別歌詞の讃美歌が複数あり、1903 年版『讃美歌』には三つの歌詞で収録。

・21-451 番「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

・21-481 番「救いの主イエスの」(I 259「あめなる主イエスの」)は、宗教改革前夜の 15 世紀後半のイタリ

アの修道士ジロラモ・サヴォナローラの作詞。彼は、当時のイタリアの社会や教会の腐敗を告発する活動を組織して異端審問の末に火刑に処せられたが、16 世紀中葉に編纂されたイタリア語聖歌集に採用された。曲は、オランダ民謡の旋律に和声がつけられたもの。英語讃美歌では、他の歌詞に付される。

**21-206「七日の旅路」****Safely Through Another Week**

1. Safely through another week / God has brought us on our way; / let us now a blessing seek, / waiting in his courts today; / day of all the week the best, / emblem of eternal rest, / day of all the week the best, / emblem of eternal rest.
2. While we pray for pard'ning grace, / through the dear Redeemer's name, / show thy reconciling face; / take away our sin and shame; / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee, / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee.
3. Here we come thy name to praise, / let us feel thy presence near; / may thy glory meet our eyes, / while we in thy house appear: / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast, / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast.
4. May thy gospel's joyful sound / conquer sinners, comfort saints; / may the fruits of grace abound, / bring relief for all complaints: / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above, / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above.

**21-451「くすしきみ恵み」= II-167****Amazing Grace! How Sweet the Sound**

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

**21-481「救いの主イエスの」****Giesu sommo conforto****English translation**

1. Jesus, refuge of the weary, / Blest Redeemer, whom we love, / Fountain in life's desert dreary, / Savior from the world above: / Often have Your eyes, offended, / Gazed upon the sinner's fall; / Yet upon the cross extended, / You have borne the pain of all.
2. Do we pass that cross unheeding, / Breathing no repentant vow, / Though we see You wounded, bleeding, / See Your thorn-encircled brow? / Yet Your sinless death has brought us / Life eternal, peace, and rest; / Only what Your grace hath taught us / Calms the sinner's deep distress.
3. Jesus, may our hearts be burning / With more fervent love for You; / May our eyes be ever turning / To behold Your cross anew / Till in glory, parted never / From the blessed Savior's side, / Graven in our hearts forever, / Dwell the cross, the Crucified.